

## 難波西鶴と

## 海の道

【33】

森田 雅也

前回、西鶴の『日本永代蔵』〔元禄元(1688)年刊〕巻四の

四「茶の十徳も一度に皆」の福井敦賀の「小橋の利助」は、茶がらを煮出して「えびす茶」として販売し、大もうけしながら、精神に錯乱をきたし、医者も見放す重篤になったというところまで紹介しました。

前々回までの利助は、無産の振り売りの身から知恵才覚だけで大金持ちになるといふ、まさに商人のかがみでした。ところが今風に言う「商品偽装」をやってしまったわけです。

らを用いて客に売るとは商売人として言断。天罰を受けたのか、利助の体はさらにもむしばまれていきます。

(末期の水代わりのお茶を)目に見せても、咽に因果の關磨りて、息も引き入る時、内蔵の金子取り出させて、跡(足もと)や枕にならば、「我が死んだらば、この金銀、誰が物にかなるべし。思へば、惜しやかなしや」と、しがみ付きかみ付き、涙に紅の筋引き、顔つきは大きながら、角なき青鬼のひとし。

## 角のない地獄の青鬼



関西学院大学図書館所蔵『日本永代蔵』巻四の四挿絵より

利助は店の者に内蔵(金庫)の金銀を全部、

足もとや枕もとに並べさせ、死に際にもかかわらず、種やかな精神状態になることができず、「自分が死んだら、この財産はいったい誰のものになるのであるうか。考えれば残念だし、悔しい」と、金銀にしがみつき、かみつき、血の涙を流し、顔つきはまるで角のない地獄の青鬼です。

まがごとく「往生際の

むかむかしく起き上がり、「銀、銀」と言って探し回ることが、三十四、五回にも及び、後には、下々も愛想つきて物すく、病家にゆく人もなく、やうやう台所に大勢集まり、棒乳切木を手毎に持ち、身用心をして、二、三日も音のせぬ時、あまた立ちかきなりて見しに、金銀に取り付き、眼を開きし有様、人皆魂なかりき。

と、使用人たちも利助の病室に近づかなくなり台所に集まり、護身の道具を持って身構えて、2、3日。やっとな静かになったので、皆で確認に行くと、すごい形相で金銀にとりついたまましくなっている利助の姿があり、皆々恐怖で腰を抜かしてしまいました。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

## 金銀にとりついた最期